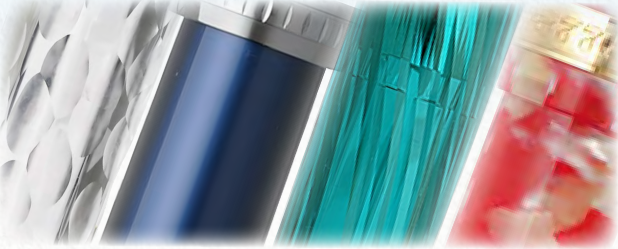
万年筆の秘密基地

まんねんひつ　ひみつきち

くみ

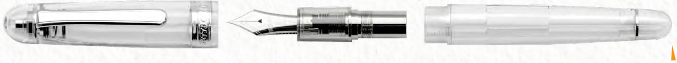
第6回

胴軸の秘密に迫る！ ～胴軸編～



みなさん、こんにちは！『万年筆の秘密基地』です。
前回まで、先軸（首軸）とキャップについて紹介してきました。今回は胴軸についてお話しします。
では早速、行ってみましょう！

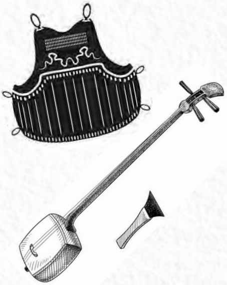
胴軸はココ！



なぜ「胴」って呼ぶの？

「胴」は身体の中心

日本では、身体の中心部分を表す言葉として「胴」が使われています。それが、身体だけでなく物や構造の中心部分も「胴」と呼ぶようになりました。つまり、胴軸は万年筆の中心に位置する、ということです。



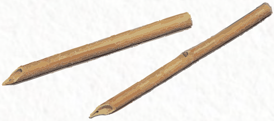
剣道の道具、三味線などの音を響かせる箱の部分、飛行機の乗客や貨物を乗せる部分も、「胴」と呼びますね。

では、その万年筆の胴軸がどのようにして今のカタチになったのか、万年筆の誕生をたどってみましょう！

万年筆のルーツ

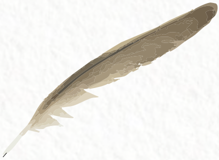
ペンのはじまり

紀元前、植物にインクや染料を吸わせて使ったのがペンの始まりと言われています。6世紀ごろ羽根ペンが、19世紀初めに金属製のペンが誕生しました。



葦（あし）ペン

紀元前、葦に切り込みを入れ、
インクを吸わせて使っていた。



羽根ペン

6世紀ごろ、鳥の羽根を加工し、
インクをつけて書いていた。

19世紀後半、インクを内部に蓄え、ペン先へ供給する万年筆が発明されました。この構造が、胴軸の誕生につながりました。

初期の万年筆

初期の万年筆の胴軸には、当時最先端の素材だった「エボナイト」が使用されました。

POCKET-CLIP

エボナイト製の万年筆
プラチナ万年筆　555（スリーファイブ）1920 年

「エボナイト」は丈夫で加工がしやすく、酸やアルカリにも耐性があります。当時のインクは酸性のものが多かったため、万年筆にもってこいの素材でした。

「エボナイト」は細かい加工もしやすかったため、ペン芯にも使われていたんですよ！

「エボナイト」ってなあに？

「エボナイト」はゴムの一種で、1850年ごろにプラスチック普及前の新素材として登場しました。電気を通さないため、電話機の絶縁材料に使われたり、万年筆の他、ボウリングの球やパイプの吸い口にも用いられました。

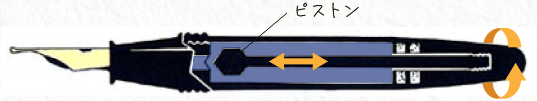
インク補充方法の進化

「インクを補充して使う」という構造が万年筆の基本となると、さまざまな補充方法が考案されました。

それにより胴軸に新たな機能が加わり、構造に適した

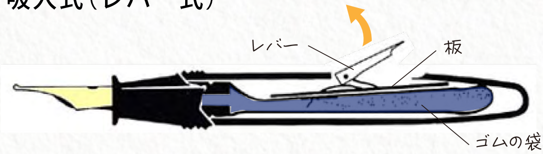
カタチが生まれました。その一部を紹介します！

止め式（プランジャー式）



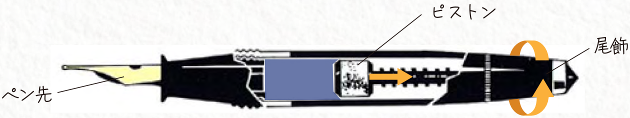
先軸（首軸）を外し、胴軸の中に直接インクを入れる。携帯時はピストンでインクが流れないよう栓をして、筆記時にはピストンを動かしてインクの通り道をつくることで、インクがペン先へ流れる。

てこ吸入式（レバー式）



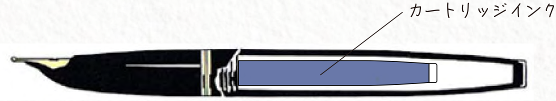
胴軸内にゴムの袋と板がある。レバーを引き、てこの原理で袋を圧縮。レバーを戻す際、ゴムの袋がもとに戻ろうとする力でインクを吸入する。

ピストン式（ピストンフィラー式）



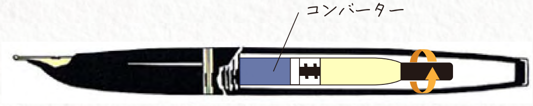
ペン先を瓶インクに浸けた状態にし、尾飾を回転させピストンを動かすことで、胴軸内の気圧が下がりインクが吸い上げられる。

カートリッジ式



専用のカートリッジインクを差し込んで使う。交換が簡単で、持ち運びしやすいところがポイント。カートリッジインクを世界で初めて実用化したのは、プラチナ万年筆なんです！

コンバーター式



カートリッジインクと同じく、差し込んで使う。瓶インクから吸入できることが特徴。コンバーターの内部にピストン機構があり、ピストン式（ピストンフィラー式）のようにインクを吸う。

素材で広がるバリエーション

個性を生み出す素材たち

てこ吸入式（レバー式）をはじめ、胴軸に直接インクが触れなくなったことやエボナイトに代わる新素材の登場によって、胴軸にさまざまな素材が使われるようになりました。

※詳しくは別の回で紹介予定です。お楽しみに！

合成樹脂

カラー展開が豊富。さまざまな加工も施せるのが特徴。

金属

金属特有の輝きに高級感があり、耐久性に優れているのが特徴。

木

あたたかみを感じる手触りと独特の風合いが魅力。

現代の楽しみ方

透明軸とインク

本体に合成樹脂を使った万年筆の中でも、全体が透明のタイプは、補充したインクもデザインの一部になります。色味も楽しめるので、インク好きからも人気があります。

今回は、万年筆の胴軸について、どんな役割があるのか、万年筆の誕生と進化に沿って紹介しました。

次回からは『えらぶ』の項目になります。万年筆を選ぶ際のポイントなど紹介していきます。お楽しみに！

PLATINUM
JAPAN 1919